

羽計清水西遺跡

——一般県道下総橋停車場東城線埋蔵文化財調査報告書——

平成13年3月

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

は
羽
計
ばかり
し
みず
にし
清水西遺跡

——一般県道下総橋停車場東城線埋蔵文化財調査報告書——



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第401集として、千葉県土木部の一般県道下総橋停車場東城線事業に伴って実施した香取郡東庄町羽計清水西遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この遺跡では、二重周溝を持つと思われる円墳と古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護と理解のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成13年3月30日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 中村好成

凡　　例

- 1 本書は、千葉県土木部による一般県道下絶橋停車場東城線事業に伴なう埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県香取郡東庄町羽計2,732-171ほかに所在する羽計清水西遺跡（遺跡コード 349-006）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、主任技師 荒木清一 上席研究員 遠藤治雄 が担当し、全体の編集は遠藤治雄が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部、東庄町教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第2図 國土地理院発行 1/25,000地形図
 - 第3図 千葉県発行 1/2,500都市計画図を1/5,000
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成7年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方針は、すべて座標北である。
- 10 本書で使用したスクリーントーンの用例は、次のとおりである。



カマド



焼土

本文目次

Iはじめに	1
1 調査の概要	1
(1) 調査の経緯と経過	1
(2) 調査の方法	1
2 遺跡の位置と歴史的環境	3
(1) 遺跡の位置と周辺の遺跡	3
II検出した遺構と遺物	6
1 概要	6
2 旧石器時代	9
3 古墳時代	9
(1) 塚穴住居	9
(2) 溝状遺構	11
(3) 古墳	12
4 奈良・平安時代	16
(1) 塚穴住居	16
5 中・近世	26
(1) 土坑	26
(2) 溝状遺構	29
IIIまとめ	31
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1図 グリッド設定図	2	出土遺物	17
第2図 羽計清水西遺跡と周辺遺跡位置図	4	第15図 005号竪穴住居跡出土遺物	18
第3図 羽計清水西遺跡周辺地形図	5	第16図 006号竪穴住居跡出土遺物	20
第4図 基準層序	6	第17図 007号竪穴住居跡及び出土遺物	22
第5図 羽計清水西遺跡検出遺構	7	第18図 008号009号竪穴住居跡及び008号出土	
第6図 羽計清水西遺跡下層確認トレンチ	8	遺物	23
第7図 出土石器	9	第19図 011号竪穴住居跡	24
第8図 石器出土分布	9	第20図 土坑群	27
第9図 010号竪穴住居跡及び出土遺物	10	第21図 021号土坑	28
第10図 001号027号溝状遺構及び出土遺物	11	第22図 024号土坑及び025号溝状遺構	28
第11図 1号墳	13	第23図 002溝状遺構	30
第12図 1号墳主体部	14	第24図 003溝状遺構	30
第13図 1号墳出土遺物	15	第25図 020溝状遺構	30
第14図 004号005号006号竪穴住居跡及び004号			

図版目次

図版1 周辺航空写真		図版8 007号竪穴住居跡 007号竪穴住居跡カマド	
図版2 調査区全景 調査区近景 旧石器出土状況		008号竪穴住居跡	
図版3 001号溝状遺構 027号溝状遺構 027号溝状遺構断面		図版9 009号竪穴住居跡 010号竪穴住居跡 011号竪穴住居跡	
図版4 1号墳全景 1号墳主体部遺物出土状況 1号墳主体部		図版10 012～019号 土坑群 図版11 021～025号 土坑群	
図版5 1号墳主体部掘り方 1号墳内側周溝 1号墳内側周溝断面		図版12 003号溝状遺構 020号溝状遺構 遺構確認状況	
図版6 004号竪穴住居跡 004号竪穴住居跡カマド 005号住居跡		図版13 旧石器 027号出土遺物 1号墳出土遺物 図版14 004号～006号出土遺物	
図版7 005号竪穴住居跡カマド 006号竪穴住居跡 006号竪穴住居跡カマド		図版15 005号～010号出土遺物	

I はじめに

1 調査の概要

(1) 調査の経緯と経過

千葉県土木部では、幹線道路網整備の一環として、一般県道下総橋停車場東城線道路改良事業を計画した。この道路が計画された東庄町を含む利根川下流域の台地は、自然条件に恵まれ、旧石器時代から歴史時代に至る埋蔵文化財が数多く所在する地域である。このため、下総橋停車場東城線の建設に先立ち、千葉県教育委員会では千葉県土木部建設課と慎重な協議を重ねた。その結果、路線内に所在する埋蔵文化財については記録保存の措置がとられることになり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになった。以下、年度ごとに担当者、調査期間、調査面積等を列記する。

平成9年度 調査部長 西山太郎 東部調査事務所長 石田廣美

調査対象 上層確認調査 1,300m²/1,300m² 上層本調査 870m²

下層確認調査 26m²/1,300m²

調査期間 平成9年4月1日～5月30日 担当 主任技師 荒木清一

整理期間 平成9年9月1日～12月26日 担当 主任技師 荒木清一

整理内容 水洗及び注記作業

平成12年度 調査部長 沼澤豊 東部調査事務所長 折原繁

調査対象 上層本調査 723.2m² 下層確認調査 48m²/723.2m²

調査期間 平成12年9月1日～9月29日 担当 上席研究員 遠藤治雄

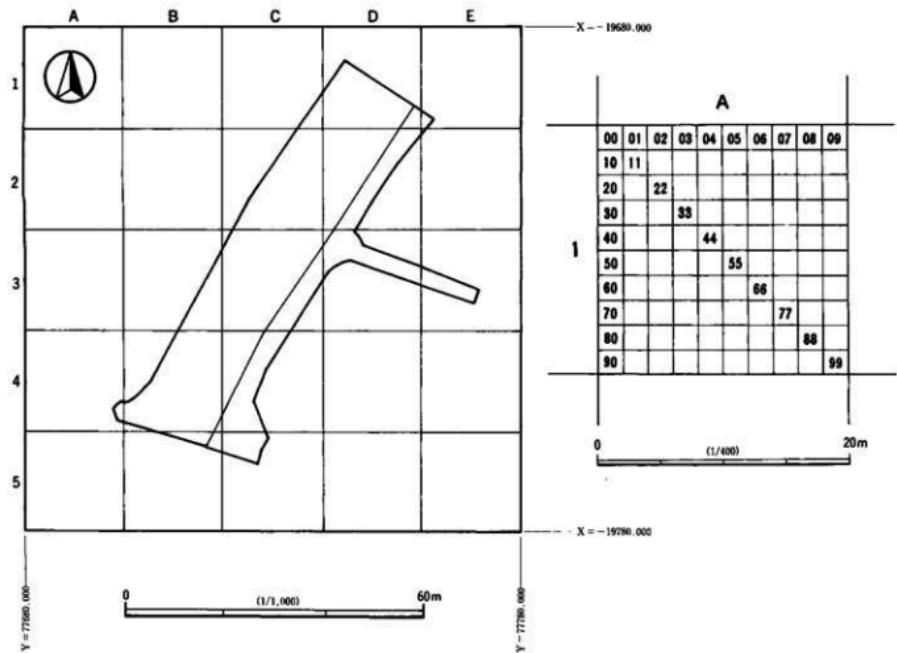
整理期間 平成12年10月1日～11月30日 担当 上席研究員 遠藤治雄

整理内容 水洗及び注記作業 原稿執筆

(2) 調査の方法

調査区の設定 調査対象範囲全域を、公共座標に合わせて東西南北に20m×20mの方眼網を設定し、大グリッドとした。大グリッドの呼称法は、北西に起点を置いて、北から南に1, 2, 3, ……とし、西から東へA, B, C……として、これを組み合わせて使用した。大グリッド内は2m×2mに100分割の小グリッドを設定し、北西隅を起点に00, 01, 02……として南西隅を99とする。小グリッドの表記はこれにより、大グリッドと小グリッドを組み合わせて、たとえば、1A-00, ……1A-99のようになる。(第1図)

遺構番号 調査時点においては、検出された遺構に対して精査を行った順に001号跡、002号跡……のように一連番号を付した。古墳については同様に1号墳……と付した。本書では、調査時の遺構番号を踏襲して表記していくこととした。したがって文中では例えば001号溝状遺構、004号竪穴住居跡、021号土坑のように表記した。整理段階において遺構と判断しかねるものも欠番となった遺構もあったが、後日の混乱を避けるため、遺構番号の変更はしなかった。



第1図 グリッド設定図

2 遺跡の位置と歴史的環境

(1) 遺跡の位置と周辺の遺跡

羽計清水西遺跡の所在する東庄町は、千葉県の北東部に位置する香取郡の東端にあって、板東太郎の異名をもつ利根川に面した町である。町の北部には利根川とその支流の黒部川に沿った低湿地が広がり、笠川付近から南に向かって旧河沼の形成した袋状の低湿地が大きく広がっている。また、南部には干潟町から海上町に至る旧椿海の低湿地が広がっており、この両低湿地に挟まれて東総台地が北西→南東方向に細長く伸びている。台地の幅は平均約3kmほどであるが、東庄町大友付近では両低湿地に最も接近し、約1kmと細く伸びている。東総台地は香取郡から銚子に至る標高約50mの平坦な台地で、香取郡内の最高地点である南端の小南地区の城山でも標高56.5mである。

現在JR成田線と国道356号は利根川と東総台地の間に横たわる河岸段丘と砂州の上を銚子に向かって走っている。羽計清水西遺跡は東総台地の最もくびれた部分の北側にあたる標高52mの台地上にあって、河岸段丘から北東方向に進入してくる支谷の谷頭部に位置している。遺跡は千葉県香取郡東庄町羽計2,732-17ほかに所在する。

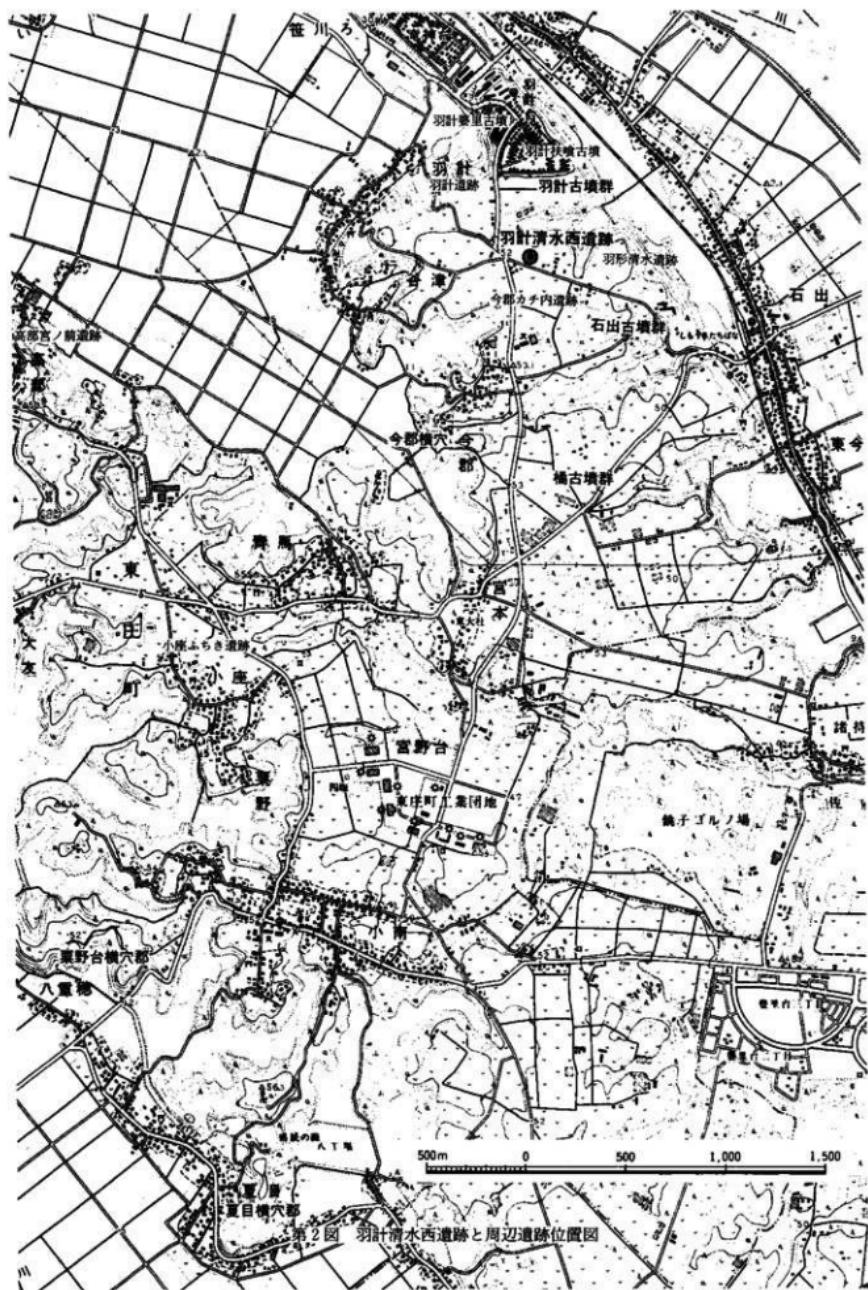
周辺の歴史的環境についてみてみる。まず旧石器時代については調査例が少なく、実態がわかるものとしては、今郡カチ内遺跡¹⁾が知られる程度である。縄文時代では、早期から後晩期に至る各時期が知られているが、そのほとんどが散布地を確認するにとどまっている。年能遺跡の発掘調査で堅穴住居跡が検出されている。弥生時代では、高部宮ノ前遺跡²⁾、年能遺跡、栗野台遺跡の発掘調査で堅穴住居跡が検出されている。古墳は利根川に面する台地上に多数確認されている。羽計古墳群中の羽計婆里古墳、羽計扶喰古墳は昭和46年に調査が行われた。2基とも墳丘部は失われていたが、羽計婆里古墳は、全長約20mの前方後円墳で、男女各1体の人骨が出土し、女性人骨の顔面には赤色塗料が残っていた。羽計扶喰古墳は径約20mの円墳で、主体部からは馬具・鉄鏃が出土した。いずれも後期に属する古墳である³⁾。ほかに橘古墳群、四塚古墳群、石出古墳群等の存在が確認されている。集落跡としては、高部宮ノ前遺跡¹⁾、今郡鍛治内遺跡等大規模なものが確認されている。横穴は、今郡、夏目、谷津、稻荷、栗野台に所在が確認されているが、正確な基数・実態等は明らかではない。奈良・平安時代の集落跡としては、今郡東ノ台遺跡³⁾、小座ふちき遺跡¹⁾、今郡鍛治内遺跡などが確認されている。

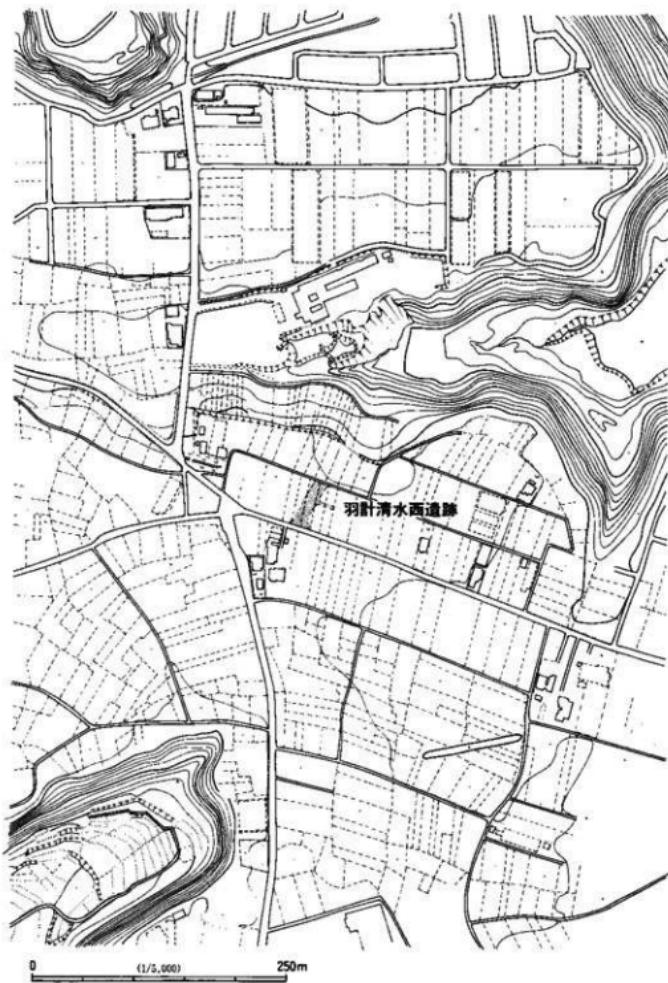
注1 小宮 孟他 1984 「東総用水 高部・宮ノ前遺跡・今郡カチ内遺跡・小座ふちき遺跡・青馬前細遺跡」

輔千葉県文化財センター

2 渋谷 興平 1967 「千葉県香取郡東庄町羽計古墳群」東庄町教育委員会

3 建部 喜光 1982 「今郡東ノ台遺跡・宮本刑部遺跡」東庄町教育委員会





第3図 羽計清水西遺跡周辺地形図

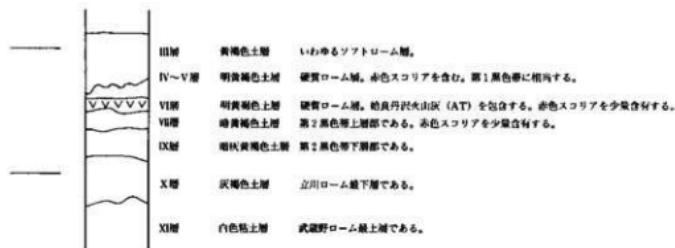
II 検出した遺構と遺物

1 概要

旧石器時代の調査は、平成9年度は、調査対象範囲の中に、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリッドを7か所、設定して実施したが、遺物の検出は認められなかった。

平成12年度も $2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリッドを7か所に設定し、確認調査を実施したところ、2Dのグリッドで石器1点を検出した。確認範囲を拡張したところ、更に1点石器を検出したが、その他に遺物の検出は認められなかったので、確認調査のみで終了した。

なお、本遺跡の基本層序は、次のとおりである。

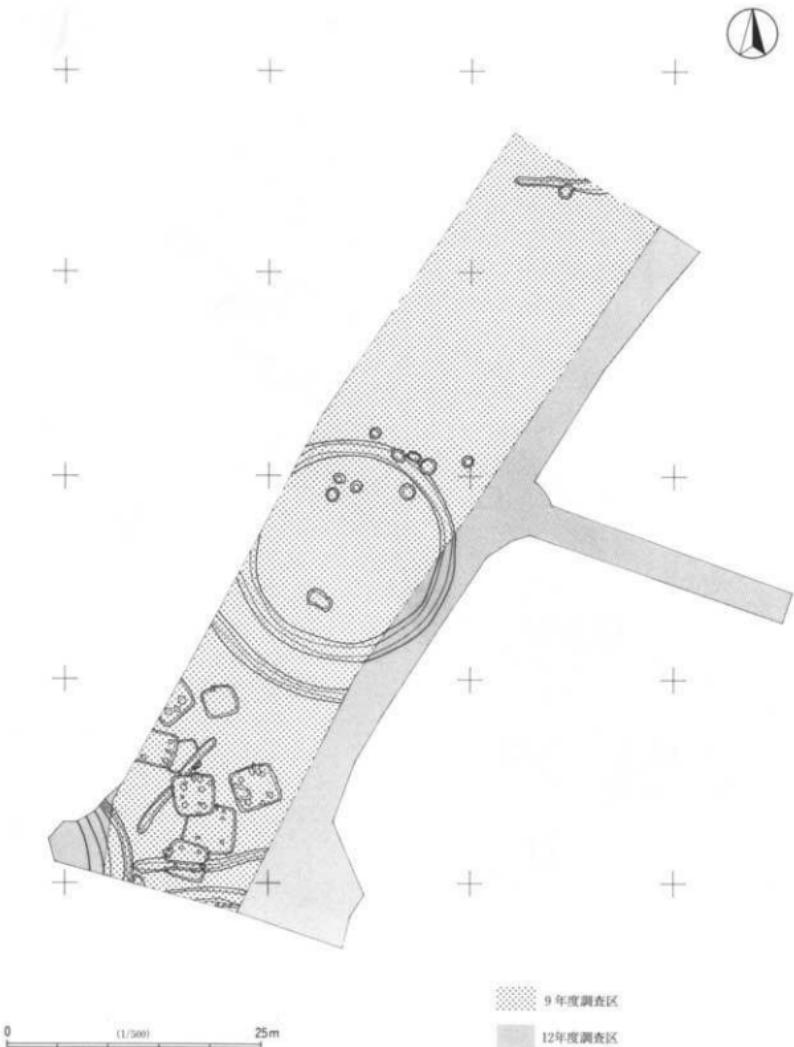


第4図 基準層序

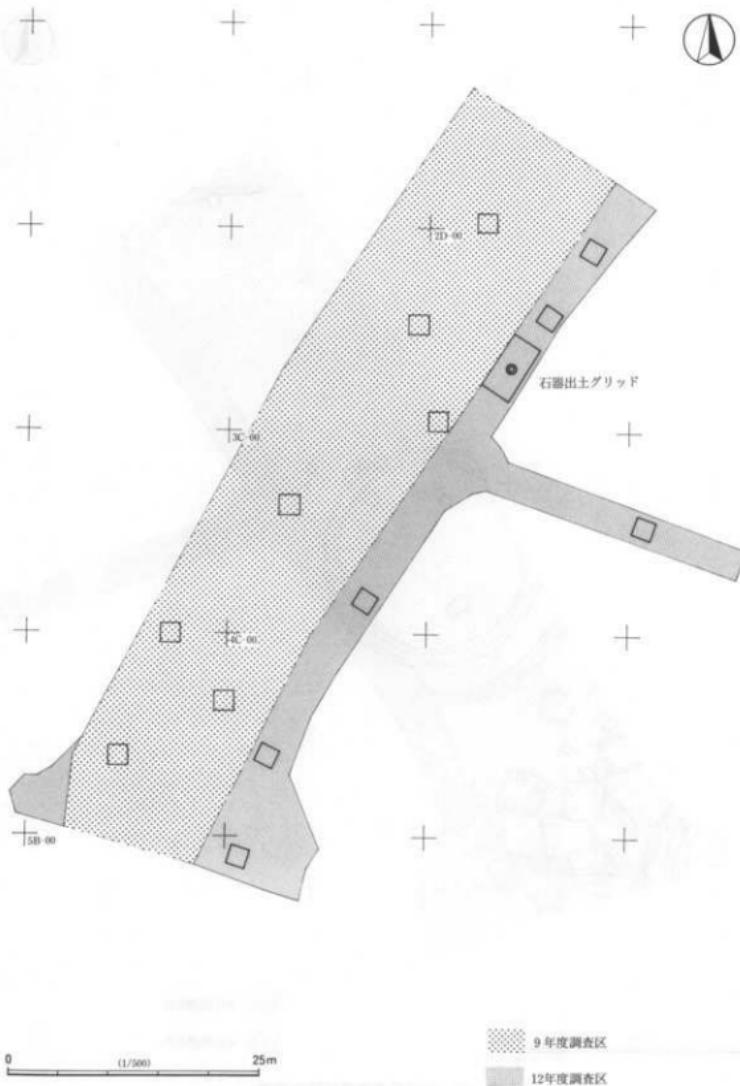
平成9年度の上層調査では、古墳時代から中世にかけて各時代の遺構を検出した。特に古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡は8軒検出したが、周辺への広がりも考えられ、この地点では、長期間にわたり、集落が形成されていたと思われる。古墳についても現在では、周辺に墳丘の確認はできないが、聞き取り調査によればかなりの数が所在していたとのことであり、大規模古墳群の存在が推測できよう。

調査区全体に耕作（牛蒡トレンチャーなどの深耕作機械）による擾乱が著しく、その深さは、竪穴跡の床面を貫いているが、遺構を大きく破壊するほどのものではなかった。しかし、出土遺物やその状況など、遺構の細かな特徴を消失させたことは否めない。特に、調査区北側緩斜面の大型掘削機械による造成が為された部分については、遺構そのものを消滅させた可能性も否定しがたい。

平成12年度の調査部分は町道として利用されており、また東總用水の埋設管が縦横に走っているため、転圧、擾乱が激しく、掘り込みの深かった古墳の周溝以外の遺構検出はできなかった。



第5図 羽計清水西遺跡検出遺構



第6図 羽計清水西遺跡下層確認トレンチ

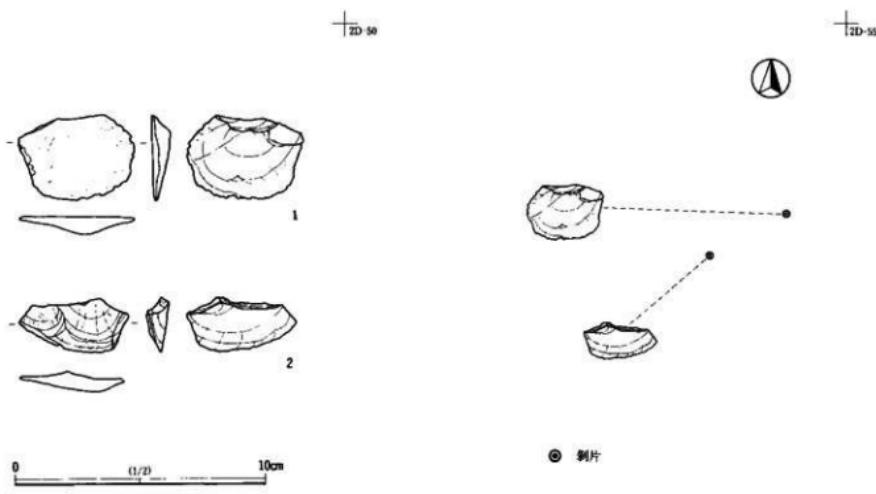
2 旧石器時代（第7・8図 図版2・13）

平成9年度の確認調査では、旧石器の検出は認められなかった。平成12年度の調査では北側緩斜面の2Dグリッドより2点、検出された。

1は安山岩Aの剥片であり、背面は裸面で覆われている。

2は安山岩Aの横剥ぎの剥片である。

出土層位は、ともにVII層である。2点のみの検出にとどまったが、調査区が狭く、用水埋設管路の擾乱もあったことを考慮すれば、周辺への広がりの可能性も考えられる。



第7図 出土石器

◎ 剥片



第8図 石器出土分布

3 古墳時代

(1) 壁穴住居

010号壁穴住居跡（遺構：第9図 図版9 遺物：第9図 図版15）

調査区南部の4Bグリッドに所在する。住居の北西側1/2は調査区外に延びている。

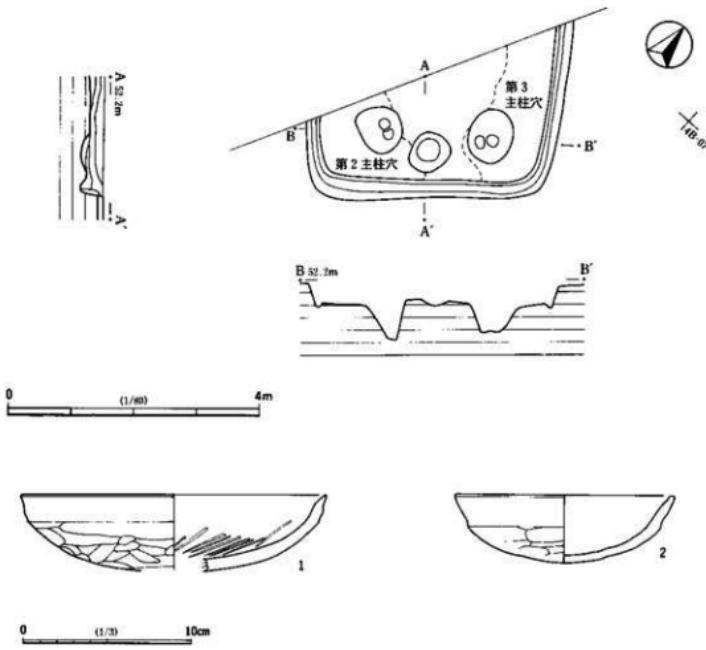
平面形は方形であり、確認できる一辺は4.0mである。確認面から床面までの深さは21~30cmである。主

軸方向はN-33°-Wである。

覆土は、暗褐色土を主体とし、全体にローム粒が混入している。覆土の上層には、黒色土の混入も認められる。下位層には、焼土粒、炭化物粒がわずかに混入している。床面上および壁際では、ローム粒の混入量が多い。

周溝は、検出床面を全周している。床面から2つの主柱穴を検出した。第1および第4主柱穴は調査区外に所在する。それぞれの深さは、第2主柱穴44cm、第3主柱穴57cmである。それぞれの底径は第2主柱穴21cm、第3主柱穴18cmである。それぞれの穴の底には、柱の痕跡が2か所ずつあるので、この住居は改築を行ったと思われる。柱痕の新旧関係は、不明であるが、壁際方向へ移動したものと思われる。検出した2つの主柱穴間の南東側壁際に出入口ピットを検出した。深さは31cmである。

出土遺物は1・2である。1は、復元口径18.2cmの土師器の壊である。焼成は良好で、外面には赤彩が施されている。色調は内面乳橙色である。胎土は白色細微粒子、赤色微粒子、黒色粒子を含む。口縁部はナデ、外面はヘラケズリ、内面はナデとヘラミガキにより調整されている。覆土中より検出した。2は復元口径13.2cmの土師器の壊である。焼成は良好で、胎土は白色細微粒子を多く含む。覆土中より検出した。



第9図 010号竪穴住居跡及び出土遺物

(2) 溝状遺構

001号溝状遺構 (遺構: 第10図 図版3)

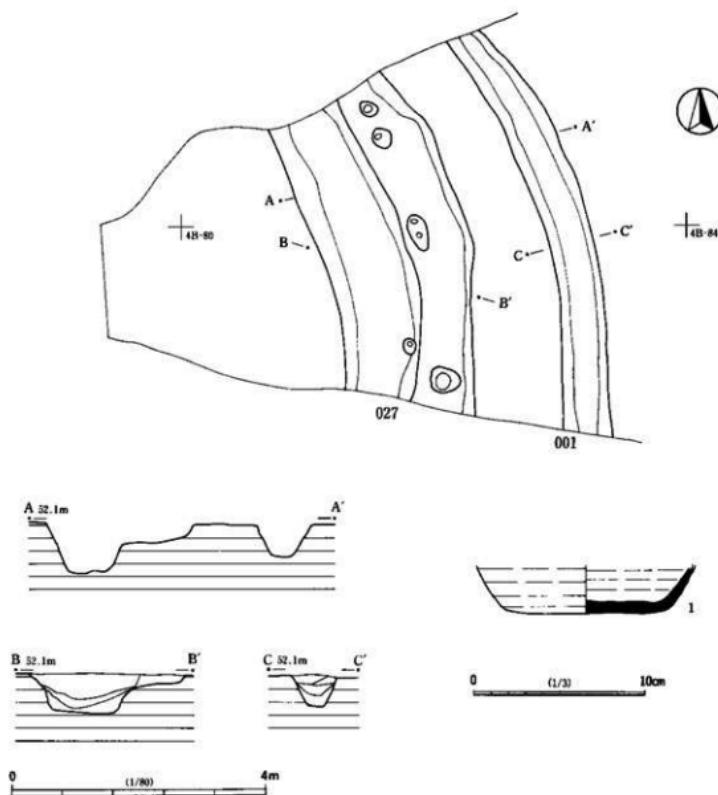
調査区の南西端、4Bグリッドに所在する。遺構の大半は、調査区外に所在する。

溝の断面は逆台形状であり、確認面での上面幅約0.7m、下底幅約0.3mである。下底部は多少の凹凸が認められるものの、ほぼ平坦である。確認面からの深さは約0.5mである。

覆土は、上層はローム粒・暗褐色土を混入した黒色土、中層はローム粒をやや多めに混入した暗褐色土、下層はロームブロックを多く混入したローム主体の層である。

この溝はほぼ南北に走る溝であるが、やや弧を描いている。二重周溝を有する円墳の外側周溝の可能性が高い。

覆土中より土師器数片を検出したが、図示できるようなものはなかった。



第10図 001号027号溝状遺構及び出土遺物

027号溝状遺構（遺構：第10図 図版3 遺物：第10図 図版13）

調査区の南西端、4Bグリッドに所在する。遺構の大半は調査区外に延びている。

溝の断面は逆台形を基本としているが、上方では外側に向けたフラットな面を有している。確認面での上面幅約2.2m、下底幅約0.4mである。下底部は多少の凹凸が認められるもの、ほぼ平坦である。

確認面からの深さは、約0.6mである。

覆土は、上層はローム粒を混入した黒色土、中層はローム粒を混入した暗褐色土、下層はロームブロックを多く混入したローム主体の層である。

001号溝状遺構同様、ほぼ南北に走る溝であるが、やや弧を描いている。二重周溝を有する古墳の内側周溝の可能性が高い。

遺物は須恵器片1点が出土している。1は、須恵器の壺であり、復元口径12.0cm、器高2.8cmである。焼成は良好であり、色調は暗灰色である。覆土中より出土している。

（3）古墳

1号墳（遺構：第11・12図 図版4・5 遺物：第13図 図版13）

調査区のほぼ中央、2C、3B・C、4B・Cグリッドに所在する。

墳丘は残存せず、表土除去後に所在が確認された。北西側、南東側の一部が調査区外であり、北東側が大きく擾乱を受けている。012号土坑、013号土坑、014号土坑、015号土坑、016号土坑、019号土坑、022号土坑と一部重複しており、これら土坑に遺構の一部を破壊されている。これら土坑が掘削された時期には墳丘部は削平され消滅していたと考えられる。

本古墳は二重周溝を持つと思われる、比較的大規模な円墳であり、内径（内側周溝内縁で計測）は約18.2mである。北東側擾乱部分では外側周溝を検出できなかったが、南西側と対称に二重周溝があったという前提で復元すると、外径（外側周溝の外縁で計測）は30.0mと推測できる。

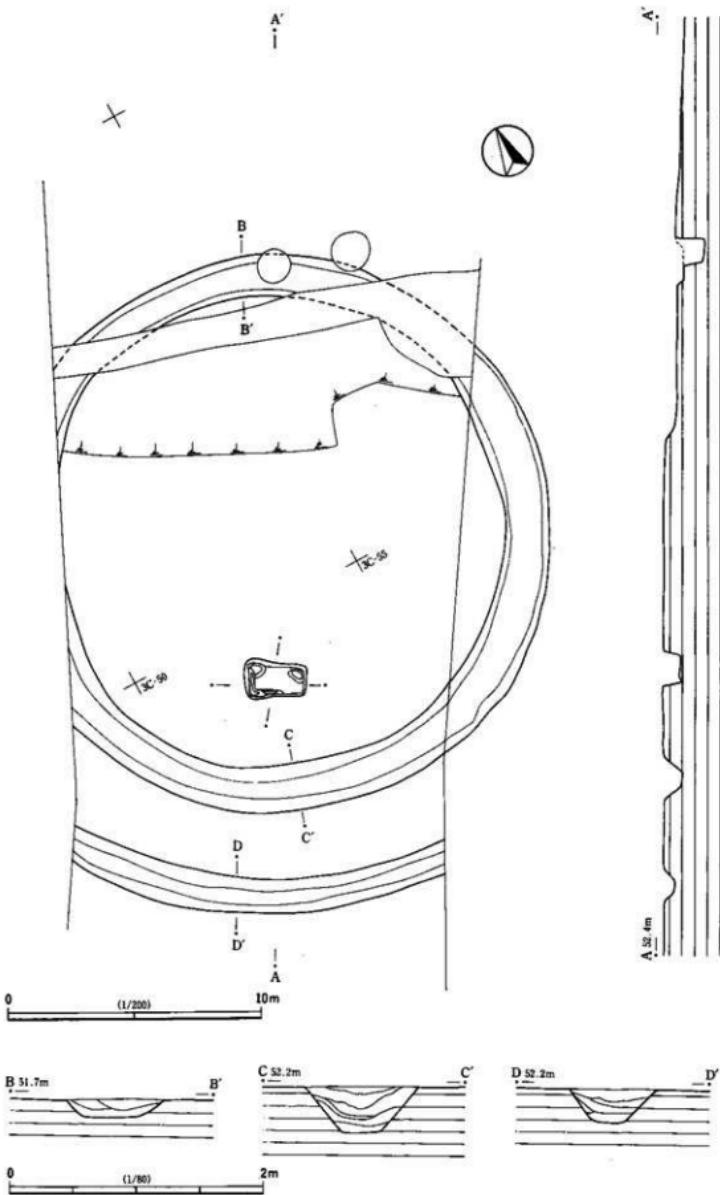
内側周溝の断面は逆台形状であり、上面幅は1.6～1.8m、下底幅は0.7～1.1m、確認面からの深さは0.5m～0.8mである。

覆土は、上層から下層にかけてローム粒、暗褐色土を混入した黒色土であり、下層は、ローム、ロームブロックを混入した明褐色土である。

外側周溝と思われる溝の断面も逆台形状を呈し、上面幅は1.1～1.6m、下底幅は0.4～0.7m、確認面からの深さは約0.4mである。外側周溝と思われる溝は、内側周溝に比べて、幅、深さとも規模は下回る。平成12年度の調査では、外側周溝と思われる溝の延長部分を追求したが、擾乱が激しく確認はできなかった。

覆土の上位層はローム粒を混入した黒色土、中位層は、ローム、ロームブロックを混入した暗褐色土であり、下位層に行くに従ってロームの混入量が増す。下位層は、100mm以上の大ロームブロックを混入した明褐色土で、しまりを欠く。

主体部は、中心より南東に約5m離れたところに位置する。耕作による擾乱をかなり受けているものの、かろうじて残存しており、長さ3.8m、幅2.2m、確認面からの深さは約0.6mである。主軸方位はN-60°-Wである。出土した石片から、もろい黒雲母片岩を板状に加工して組み合わせた箱式石棺が据えられていたものと考えられる。（図版13 1号墳-10）主体部内は後世の盜掘を受けており、擾乱が著しく、残存状態は極めて悪い。主体部底面には、石棺の側板を据えた溝が確認され溝の状態から判断すれば、石棺は、長軸約2.2m、短軸1～1.3mの規模を有し、北西側がやや幅広の形態をした箱式石棺だったと推察される。

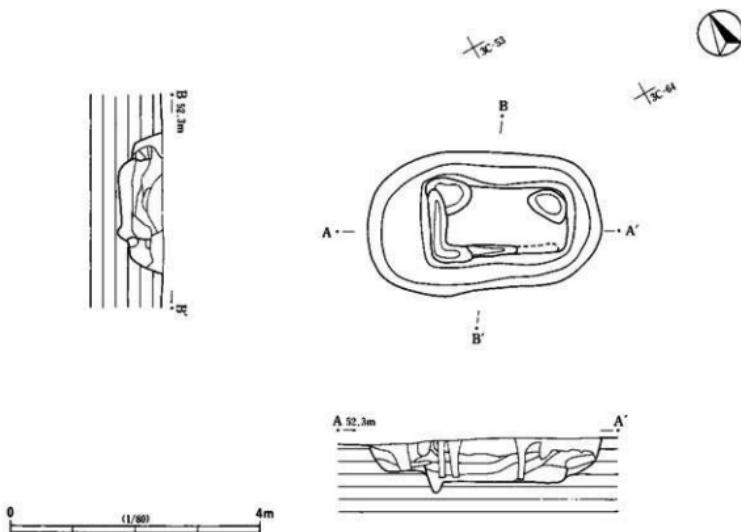


第11圖 1号墳

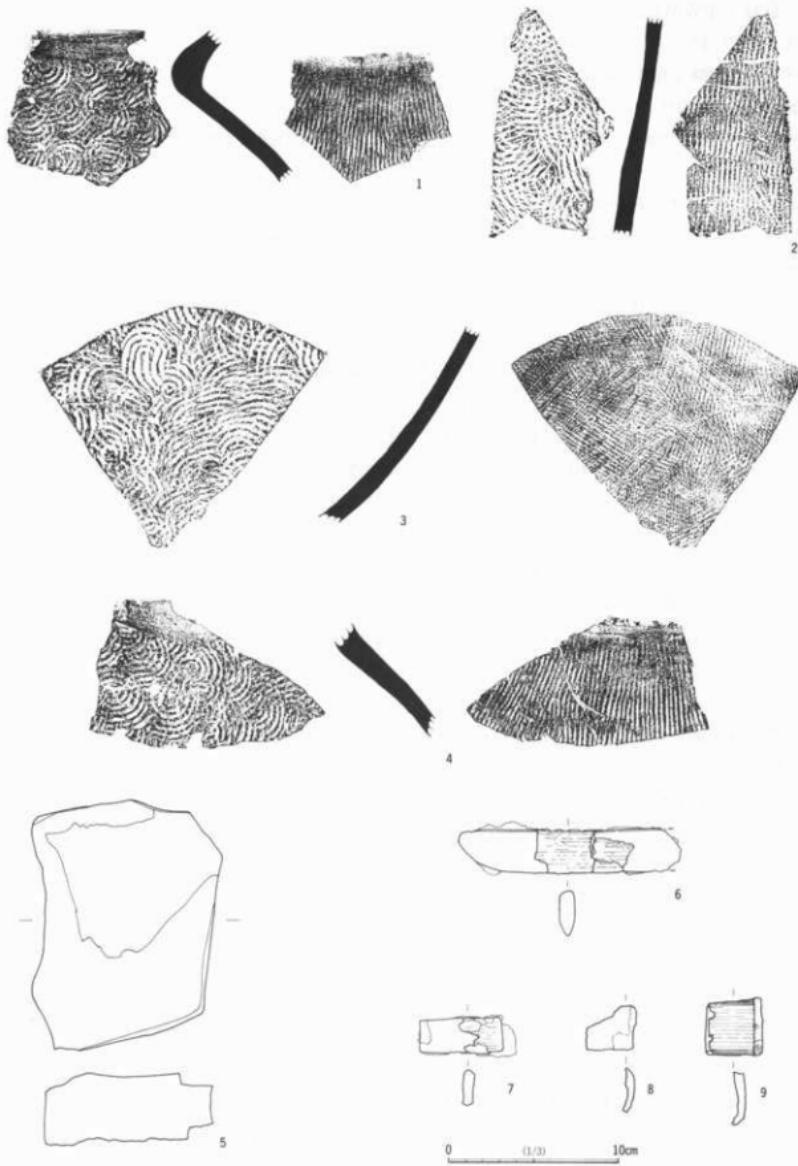
主体部の覆土は、暗褐色土を主体とし、ローム粒混入土と粘土粒混入土が確認された。石棺の構築材と思われる石片は、上位層から下位層に至るまで混在するが、主体部底面付近の10~20cmの層間に特に集中する。石棺の裏込めの残存状態も悪く、覆土中に混入しているローム、粘土粒はここから流出したものと考えられる。所々にローム粒と粘土粒の塊が、強くしまった状態で残っているので、埋葬当時は、石棺の側板を支える、しっかりとした裏込めがあったものと推測できる。

内・外側周溝から土器片・石片を多数検出したが、流れこみと判断された覆土上部の出土、あるいは攪乱内出土である遺物が主体を占める。1~4は、須恵器片である。すべて大型の甕の破片と思われるが、同一個体であるかどうかは不明である。1は頸部、2は肩部、3も肩部、4は頸部と思われる。いずれも内外面ともに敲き締めによる痕跡が顕著である。

主体部での検出遺物は以下のとおりである。5は、砥石である。素材は凝灰岩であり、比較的大型品である。少なくとも5か所の使用面が確認できる。6、7、8、9は鉄製刀子の破片であるが、同一個体であるか否かは不明である。柄もしくは鞘にあたると思われる部分の木質がよく遺存している。崩れた琥珀玉の破片も採集できたが、破損が著しく図示できなかった。



第12図 1号墳主体部



第13図 1号墳出土遺物

4 奈良・平安時代

(1) 穴居

004号豊穴住居跡（遺構：第14図 図版6 遺物：第13図 図版14）

調査区南部の4Bグリッドに所在する。

005号住居跡および006号住居跡と一部重複しており、それぞれの住居により、壁と床の一部を破壊している。

平面形は、歪んだ方形を呈している。規模は、東辺4.3mであり、更に、検出した辺の延長から西辺5.2m、北辺4.8m、南辺5.0m、床面積21.3m²と推測できる。確認面から床面までの深さは、20~32cmである。主軸方位は、N-10°-Eである。

覆土は暗褐色土を主体とし、ローム、ローム粒が混入している。微量ではあるが炭化物粒も混入している。

周溝は、北辺および東辺の一部で検出した。貼床は、ほぼ全面に認められたが、硬化面は中央部付近にやや認められるものの顕著ではない。細めの主柱穴4つを検出した。それぞれの深さは、第1主柱穴63cm、第2主柱穴70cm、第3主柱穴60cmであり、第4主柱穴は、006号住居跡の床面から検出したので正確な深さは不明であるが、他の3つの主柱穴と同等であると推測できる。それぞれの底径は第1主柱穴14cm、第2主柱穴10cm、第3主柱穴15cm、第4主柱穴13cmである。そのほかに第1主柱穴の北側に深さ24cmのピットを検出した。支柱穴とも考えられるが、性格は不明である。出入口ピットは検出していない。

カマドは、北側壁の中央部付近で検出したが、006号住居により破壊され、右袖のみ残存する。

遺物は、削平が激しいため、床面付近を中心に数点検出したのみである。そのうち、図示できたものは1点である。1は、口径17.8cm、高さ3.2cmの須恵器の蓋である。色調は、明灰色であり、焼成は良好である。形は、やや歪んでいる。胎土は、白色粒子を含み、外面は回転ヘラケズリ、内面は指ナデが施され、自然釉が認められる。住居の床直上で検出した。

005号豊穴住居跡（遺構：第14図 図版6・7 遺物：第15図 図版14・15）

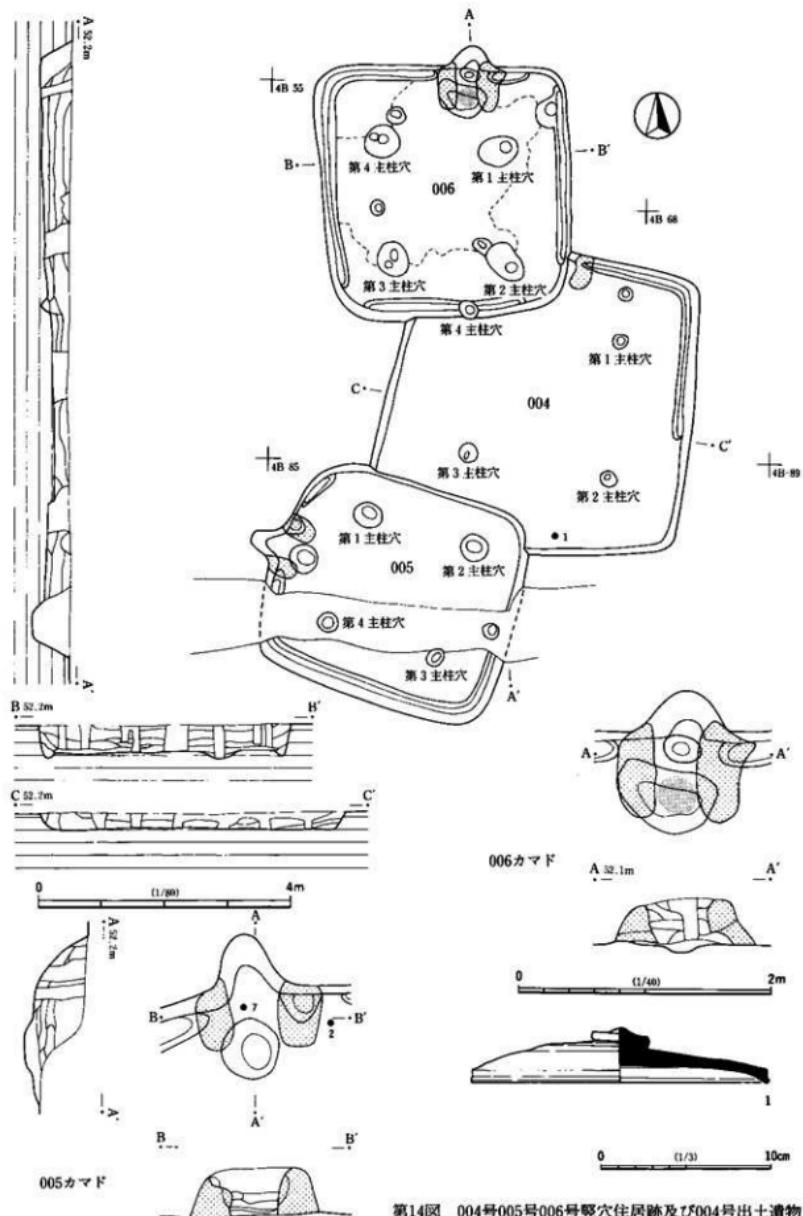
調査区の南端、4・5Bグリッドに所在する。

004号住居跡および020号溝状遺構と重複し、004号住居の壁と床の一部を切り、020号溝状遺構によって本住居跡の壁と床の一部が切られている。

平面形は方形で、規模は、3.8×3.5m、床面積11.5m²である。確認面から床面までの深さは38~42cmである。主軸方位はN-72°-Wである。

覆土は、明褐色土を主体とし、ローム粒が混入している。覆土の下層には炭化物粒の混入も見られる。全体的にややしまりがあって硬い。

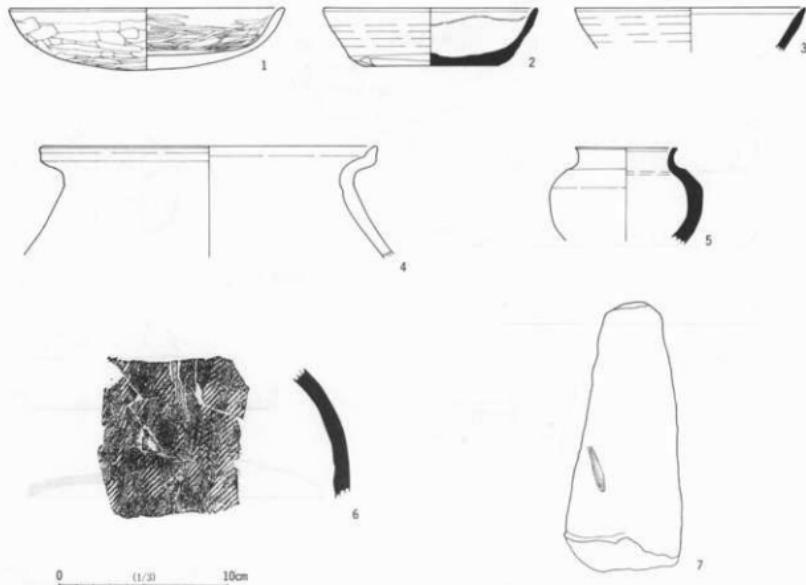
周溝は、周囲していない。貼床は、ほぼ全面に認められた。床は軟弱ではないものの、全体的に顕著な硬化面は認められない。主柱穴となる4つのピットを検出した。それぞれの深さは、第1主柱穴39cm、第2主柱穴31cm、第3主柱穴42cmであり、第4主柱穴は、020号溝状遺構の底面から検出で、正確な深さは不明であるが、他の3つの主柱穴と同等であると推測できる。それぞれの底径は第1主柱穴27cm、第2主柱穴29cm、第3主柱穴19cm、第4主柱穴20cmである。出入口ピットも、同溝状遺構の底から検出した。カマドは、西側壁の中央部に構築してある。耕作による擾乱を受けているものの、比較的良好な遺存状態であり、左右両袖部も残っている。カマド内の中央部左寄りで、ほぼ垂直に立った状態の支脚を検出した。位



第14図 004号005号006号竪穴住居跡及び004号出土物

置的にみて当時の使用状況を直接示しているかどうか疑問が残る。右袖の下には、地山をそのまま残した高まりが認められ、おそらく袖部の芯として利用したものと考えられる。カマドの下側では周溝が途切れており、住居構築にあたってはあらかじめカマドの位置を定めていたものと思われる。

出土遺物は、1～7である。1は、復元口径16.4cm、復元器高3.6cmの土師器の坏である。内外面ともに赤彩が施され、口縁部の内外面と外面にススが付着している。口縁部はナデ、外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキによって調整されている。覆土中より検出した。2は、復元口径12.8cm、復元器高3.4cmの須恵器の坏である。焼成は普通であり、色調は内面が灰褐色、外面が暗灰褐色である。胎土には白色微粒子・小石を含み、口縁部はナデ、外面底部・下端はヘラケズリによって調整されている。内面の体部に粘土の繼ぎ目、底部内面中央はヨコナデが観察できた。カマド右袖付近で検出した。3は、復元口径13.6cmの須恵器の坏である。色調は内面灰褐色、外面暗灰褐色であり、焼成は普通である。胎土には、白色微粒子を含む。口縁部は摩滅が激しいが、ナデにより調整されている。覆土中より検出した。4は復元口径20cmの土師器の壺である。口縁部のみの小破片のため全体像は不明である。覆土中より検出した。5は、復元口径6cmの須恵器の小型壺である。口縁部と体部の小破片のため全体像は不明である。焼成は良好であり、色調は灰色である。胎土は白色微粒子・小石を含む。口縁部は回転によるヘラケズリで調整されている。覆土中より検出した。6は、須恵器の体部のみの小破片である。覆土中より検出した。7は、土製の支脚であり、カマド内から検出した。色調は赤褐色であり、胎土には、白色粒子が多く、黒色微粒子が少量混入している。表面には、植物纖維と思われる痕跡が認められる。



第15図 005号竪穴住居跡出土遺物

006号竪穴住居跡（遺構：第14図 図版7 遺物：第16図 図版14・15）

調査区南部の4Bグリッドに所在する。

003号溝状遺構および004号住居跡と一部重複し、003号溝により壁の一部が破壊され、逆に004号住居跡の壁と床の一部を破壊している。

平面形は、隅丸方形であり、規模は、 $4.0 \times 3.9m$ 、床面積 $13.8m^2$ である。確認面から床面までの深さは、 $41 \sim 45cm$ である。主軸方位はN-5°-Wである。

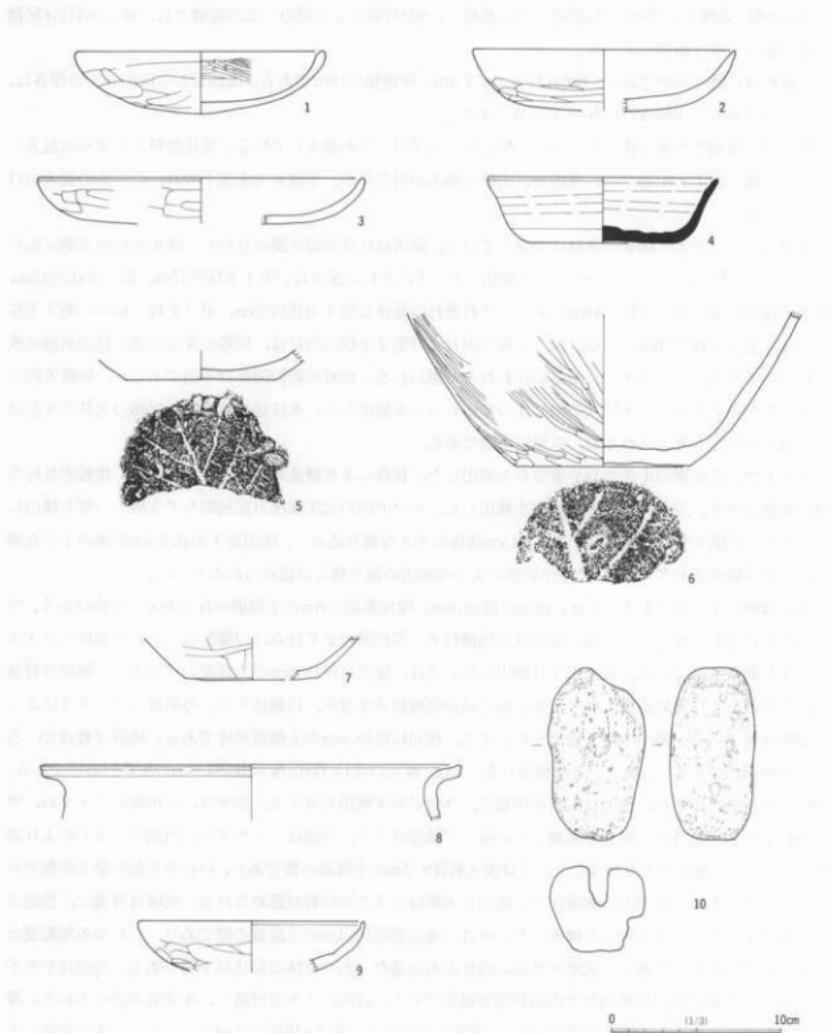
覆土は、暗褐色土を主体とし、ローム粒、ロームブロックが混入している。炭化物粒もわずかに混入している。覆土の上・中層では、黒色土、山砂の混入が目立つが、下層から床面上では、ロームの混入が目立ってくる。

周溝は、カマドと三隅を除きほぼ全周している。貼床はほぼ全面に認められた。硬化面は中央部に広がっている。主柱穴となる4つのビットを検出した。それぞれの深さは、第1主柱穴47cm、第2主柱穴42cm、第3主柱穴43cm、第4主柱穴44cmである。それぞれの底径は第1主柱穴20cm、第2主柱穴16cm、第3主柱穴20cm、第4主柱穴16cmである。第3主柱穴内および第4主柱穴内には、同等の深さの別の柱の痕跡が残されているため、この住居は、改築が行われたと思われる。柱痕の新旧関係は不明であるが、壁際方向へ動かしたと考えられる。主柱穴の他に4つの小ビットを検出した。本住居とは別の住居跡の支柱穴または出入口ビットとも考えられるが、性格は不明である。

カマドは、北側壁の中央部や東寄りで検出した。耕作による擾乱を受けているものの、比較的良好な遺存状態であり、左右両袖部と火床部を検出した。カマド内の火床部後方左袖寄りで支脚の一部を検出した。カマドの掘り方は、火床部下の深さ15cm前後の大きな掘り込みと、煙道部下の深さ5cm前後の小さな掘り込みから構成されている。005号住居跡のような地山の掘り残しは認められなかった。

出土遺物は1~10である。1は、復元口径15.0cm、復元器高3.7cmの土師器の壺である。焼成は良く、内外面ともに赤彩が施されている。胎土は白色微粒子、黒色微粒子を含み、口縁部はナデ、外面はヘラケズリにより調整されている。覆土中より検出した。2は、復元口径15.6cmの土師器の壺である。焼成は普通で、内外面ともに赤彩が施されている。胎土は白色微粒子を含み、口縁はナデ、外面はヘラケズリによって調整されている。覆土中より検出した。3は、復元口径19.6cmの土師器の壺である。焼成は普通で、色調は暗赤褐色を呈する。覆土中より検出した。4は、復元口径13.6cm、復元器高3.9cmの須恵器の壺である。焼成はやや不良であり、色調は内面が灰褐色、外面が明灰褐色を呈する。胎土は、白色微粒子・小石、黒色微粒子・小石を含む。器表が摩滅している。口縁部はナデ、外面はヘラケズリ、内面はミガキにより調整されている。覆土中より検出した。5は復元底径9.2cmの土師器の壺であり、いわゆる常総壺と呼称されているものである。底部の一部破片で、底面に木葉痕とススの付着が認められる。焼成は普通で、色調は明灰褐色を呈する。覆土中より検出した。6は、復元底径10.4cmの土師器の壺であり、いわゆる常総壺と呼称されているものである。底部・体部の破片のみの遺存であり全体の形状は不明である。焼成はやや不良であり、色調は外面が赤褐色で内面が暗黄褐色である。底面にススが付着し、木葉痕が認められる。覆土中より検出した。7は復元底径7.6cmの土師器の壺である。底部・体部の小破片であり、全体の形状は不明である。覆土中より検出した。8は復元口径25.2cmの土師器の壺である。口縁部のみの小破片であり、全体の形状は不明である。覆土中より検出した。9は土師器の杯である。口縁部はナデ、外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキによって調整されている。覆土中より検出した。10は輕石である。浮子として利用

されたもので中央部に直径1.5cmの穿孔が施されているが、深さ2.5cmで中断されている。覆土中より検出した。



第16図 006号竪穴住居跡出土遺物

007号竪穴住居跡（遺構：第17図 図版8 遺物：第17図 図版15）

調査区南部の4B・Cグリッドに所在する。

平面形は方形を呈し、規模は、 $4.1 \times 4.1\text{m}$ 、床面積 14.6m^2 である。確認面から床面までの深さは、 $20\sim 26\text{cm}$ である。主軸方位は、N-18°-Wである。

覆土は、暗褐色土を主体とし、ローム粒、炭化物粒が混入している。

周溝は、カマド付近を除き全周している。貼床はほぼ全面に認められ、硬化面は、出入口からカマドに向かう帶条の部分に広がっている。主柱穴となる4つのピットを検出した。それぞれの深さは、第1主柱穴 68cm 、第2主柱穴 68cm 、第3主柱穴 56cm 、第4主柱穴 49cm である。それぞれの底径は第1主柱穴 16cm 、第2主柱穴 17cm 、第3主柱穴 15cm 、第4主柱穴 16cm である。出入口ピットは周溝に接する形で、南側壁中央部や東寄りに検出した。深さは 11cm である。西側壁際の、第3主柱穴と第4主柱穴の間が一段高く残されておりいわゆるベッド状遺構となっている。床面との比高差は約 8cm で、全体が踏み固められ、周囲よりも硬化している。

カマドは、北側壁の東寄りで検出した。耕作による擾乱が著しかったものの、低い両袖と火床部を確認した。

出土遺物は1～4である。1は、復元口径 15.8cm の須恵器の壺蓋である。覆土中より検出した。2は、口径 10.6cm 、器高 9.4cm 、底径 6cm の土師器の壺である。焼成は普通で、色調は外面暗橙褐色、内面明橙褐色であり、外面の全体および内面の一部にススが付着している。胎土は白色微粒子を含む。口縁部はナデ、外面部・底部はヘラケズリ、内面はナデにより調整されている。床直上で検出した。3は、復元口径 10.8cm の土師器の壺である。覆土中より検出した。4は復元底径 9.8cm の土師器の壺であり、いわゆる常絶壺と呼称されているものである。焼成はやや不良である。底面に葉痕が認められる。覆土中より検出した。

008号竪穴住居跡（遺構：第18図 図版8 遺物：第18図 図版15）

調査区南部の4Bグリッドに所在する。住居の西側1/4は調査区外に延びている。

009号住居跡と一部重複し、008号住居跡が009号住居跡の壁と床の一部を切っている。

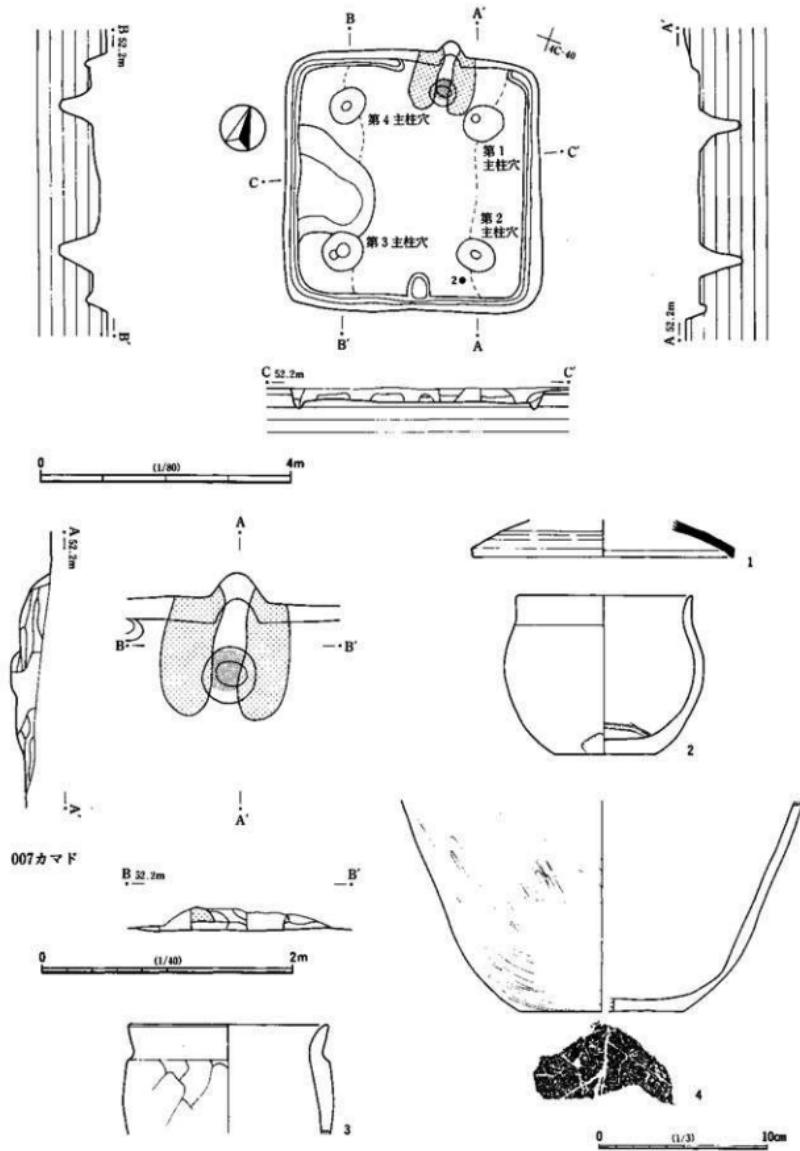
平面形は、検出された主柱穴の間隔から、東西にやや長い方形を示すと思われる。確認面から床面までの深さは、 $25\sim 30\text{cm}$ である。主軸方位はN-78°-Wである。

覆土は、暗褐色土を主体とし、ローム粒をやや多めに混入している。特に、中央部床面上には、大きめのロームブロックが多く混入している。

周溝は、検出されていない。貼床はほぼ全面に認められ、硬化面は東側出入口付近から床面中央部に広がっている。主柱穴を3本検出したが、残りの一本は調査区外にあるため確認できなかった。調査区外所在のものを第1主柱穴とし、それぞれの深さは、第2主柱穴 45cm 、第3主柱穴 55cm 、第4主柱穴 50cm である。それぞれの底径は、第2主柱穴 18cm 、第3主柱穴 19cm 、第4主柱穴 16cm である。出入口ピットは、東側壁際の中央部付近で検出した。掘り込みの深さは 27cm であった。

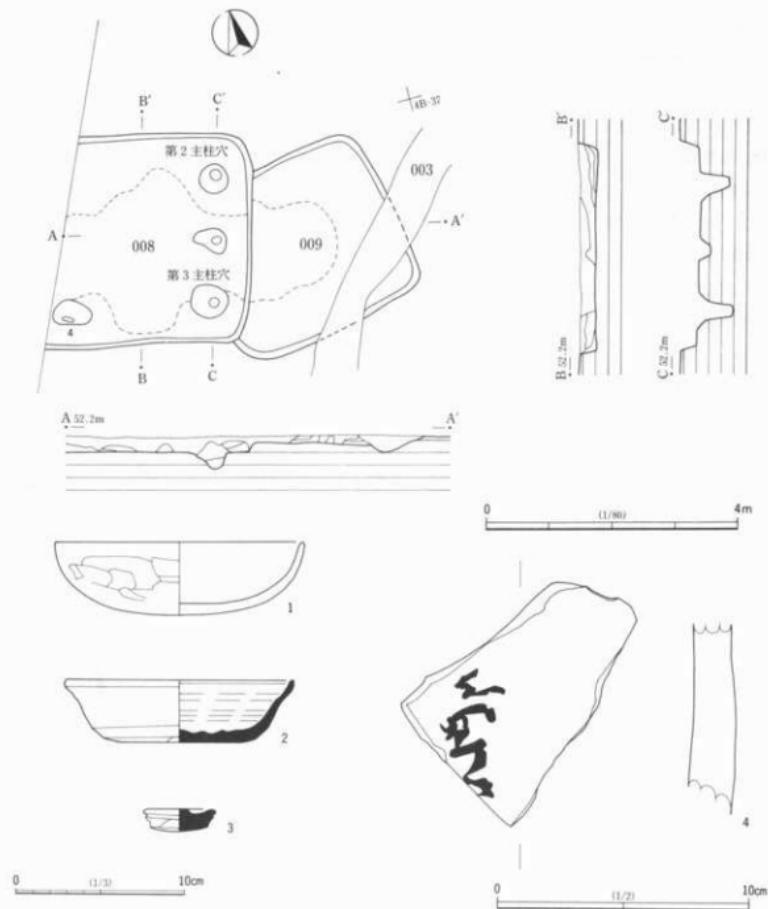
カマドは、調査区内では検出することはできなかったが、おそらく、調査区外の西側壁に設置されていたと考えられる。

出土遺物は1～4である。1は、復元口径 24.8cm の土師器の壺である。焼成はやや良く、内外面ともに赤彩が施されている。胎土は白色微粒子、黒色微粒子を少なめに含有し、色調は乳橙色である。口縁部はナデ、外面はヘラケズリの後にヘラミガキ、内面はヘラミガキにより調整されている。覆土中より検出し



第17図 007号竪穴住居跡及び出土遺物

た。2は、復元口径13.6cm、器高3.7cm、底径7.2cmの須恵器の坏である。焼成はよく、色調は暗灰褐色である。胎土は白色粒子・小石をやや多めに含む。口縁部はヘラケズリ、底部外面・体部下端はヘラケズリにより調整され、内面中央には指ナデ痕が観察できた。覆土中より検出した。3は、直径4.2cmの須恵器の蓋のツマミ部分である。焼成はやや悪く、磨滅が著しい。胎土は白色微粒子、黒色微粒子を含み、色調は明灰色である。覆土中より検出した。4は墨書の施された土師器片である。一部分なので、断定できないが、「道」の草書体ではないかと推測される。覆土中より検出した。



第18図 008号009号竪穴住居跡及び出土遺物

009号竪穴住居跡 (遺構: 第18図 図版9)

調査区南部の4Bグリッドに所在する。

008号住居跡および003号溝状遺構と一部重複し、008号住居跡と003号溝状遺構が壁と床の一部を切っている。平面形は、東西にやや長い方形である。規模は、 $3.2 \times 2.8\text{m}$ 、復元した床面積 7.8m^2 である。確認面から床面までの深さは、 $5 \sim 9\text{cm}$ である。主軸方位はN-103°-Wである。

覆土は、暗褐色土を主体とし、ローム粒が混入している。覆土の上層は黒色土が混入、床面上にはロームブロックの混入が顕著である。

周溝、柱穴、出入口ピットは、発見されていない。貼床は、中央部にのみ認められ、壁際では施工されていない。硬化面は顕著ではないが、中央部付近に広がっていない。

カマドは、検出することは出来なかったが、008号住居によって破壊された西側壁にあったと思われる。図示できるような遺物は、出土していない。

011号竪穴住居跡 (遺構: 第19図 図版9)

調査区南部の4Bグリッドに所在する。

平面形は方形で、規模は、 $2.8 \times 3.2\text{m}$ 、床面積 7.4m^2 である。確認面から床面までの深さは、 $9 \sim 14\text{cm}$ である。主軸方位はN-14°-Wである。

覆土は暗褐色土を主体とし、ロームブロック、ローム粒が混入している。覆土上層の中央部付近は、黒色土の混入が顕著である。下層や壁際付近は、ロームブロックが多く混入している。カマド付近には、山砂、焼土粒が混入している。

周溝、ピットは検出されていない。貼床は、施工されていない。床全体が軟弱であり、硬化面はいっさい認められない。

カマドは、北側壁の中央部に検出したが、耕作による攪乱のため遺存状態が悪く、低い左袖と煙道の立ち上がり部分のみが確認できた。

図示出来るような遺物は出土していない。

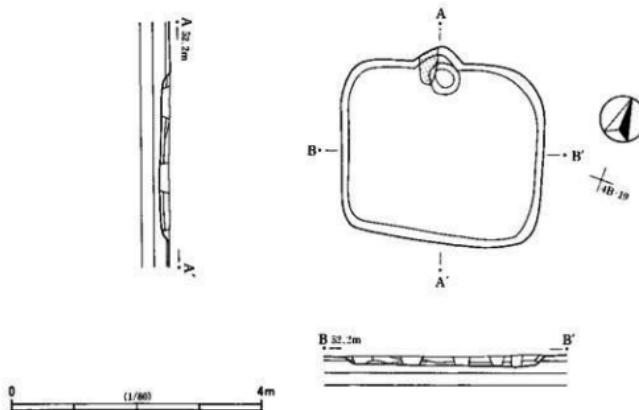


図19図 011号竪穴住居跡

5 中・近世の遺構

中・近世の遺構としては、土坑12基と溝5条を検出した。いずれの遺構も伴出遺物がなかったが、覆土の状況より、中・近世の遺構であろうと判断した。

(1) 土坑

012号土坑（遺構：第20図 図版10）

調査区中央部の3Cグリッドに所在する。

1号墳と一部重複し、同古墳の一部を破壊している。

直径1.3m、確認面からの深さ63cmの円形土坑である。

覆土は、暗褐色土を主体とし、上層には黒色土、ローム粒が混入し、下層には、ローム粒、ロームブロックが混入している。

遺物は、出土していない。

013号土坑（遺構：第20図 図版10）

調査区中央部の2・3Cグリッドに所在する。

1号墳と一部重複し、同古墳の一部を破壊している。

直径0.9m、確認面からの深さ27cmの円形土坑である。

覆土は、暗褐色土を主体とし、ローム粒が混入している。

遺物は、出土されていない。

014号土坑（遺構：第20図 図版10）

調査区中央部の3Cグリッドに所在する。

1号墳と一部重複し、同古墳の一部を破壊している。

直径1.1m、確認面からの深さ31cmの円形土坑である。

覆土は、暗褐色土を主体とし、ローム粒が混入している。上層には黒色土の混入が認められ、下層に行くに従いローム粒、ロームブロックの混入が多くなる。

遺物は、出土していない。

015号土坑（遺構：第20図 図版10）

調査区中央部の3Cグリッドに所在する。

1号墳と一部重複し、同古墳の一部を破壊している。

直径1.6m、確認面からの深さ30cmの円形土坑である。

覆土は、暗褐色土を主体とし、ローム粒が混入している。

遺物は、出土していない。

016号土坑（遺構：第20図 図版10）

調査区中央部の2Cグリッドに所在する。

1号墳の周溝と一部重複し、周溝の一部を切っている。

直径1.3m、確認面からの深さ1.1mの円形土坑である。須恵器片が数点出土している。

覆土は、暗褐色土を主体とし、ローム粒が混入している。上・中層には、黒色土の混入が顕著であり、ややしまりもある。下位層には、ローム粒、ロームブロックの混入が顕著であり、しまりを欠く。*

須恵器片が出土しているが、図示できるようなものはなかった。

017号土坑（遺構：第20図 図版10）

調査区中央部の2Cグリッドに所在する。

直径1.1m、確認面からの深さ70cmの円形土坑である。

覆土は、暗褐色土を主体とし、ローム粒が混入している。

遺物は、出土していない。

018号土坑（遺構：第20図 図版10）

調査区中央部の2Cグリッドに所在する。

直径1.0m、確認面からの深さ89cmの円形土坑である。

覆土は、暗褐色土を主体とし、ローム、ロームブロックが混入している。上・中位層は、黒色土、明褐色土が混入し、ややしまりもあるが、下位層はしまりを欠く。

遺物は、出土していない。

019号土坑（遺構：第20図 図版10）

調査区中央部の2C・Dグリッドに所在する。

1号墳周溝と一部重複し、周溝の一部を破壊している。

長軸1.3m、短軸1.0mの方形土坑である。確認面からの深さは、70cmである。

覆土はしまりがなく、暗褐色土を主体とし、ローム粒が混入している。

遺物は、出土していない。

021号土坑（遺構：第21図 図版11）

調査区の南西端、4Bグリッドに所在する。

001号溝状遺構に近接し、1/3は調査区外に延びている。

直径1.3m、確認面からの深さは93cmの円形土坑である。覆土は、暗褐色土を主体とし、ローム、ロームブロックが多量に混入している。

遺物は、土器片を数点検出したが、図示できるようなものはなかった。

022号土坑（遺構：第20図 図版11）

調査区中央部の3Cグリッドに所在する。

1号墳周溝と一部重複し、周溝の一部を破壊している。

直径1.6m、深さ63cmの円形土坑である。

覆土は、暗褐色土を主体とし、ローム粒、ロームブロックが混入している。

遺物は、出土していない。

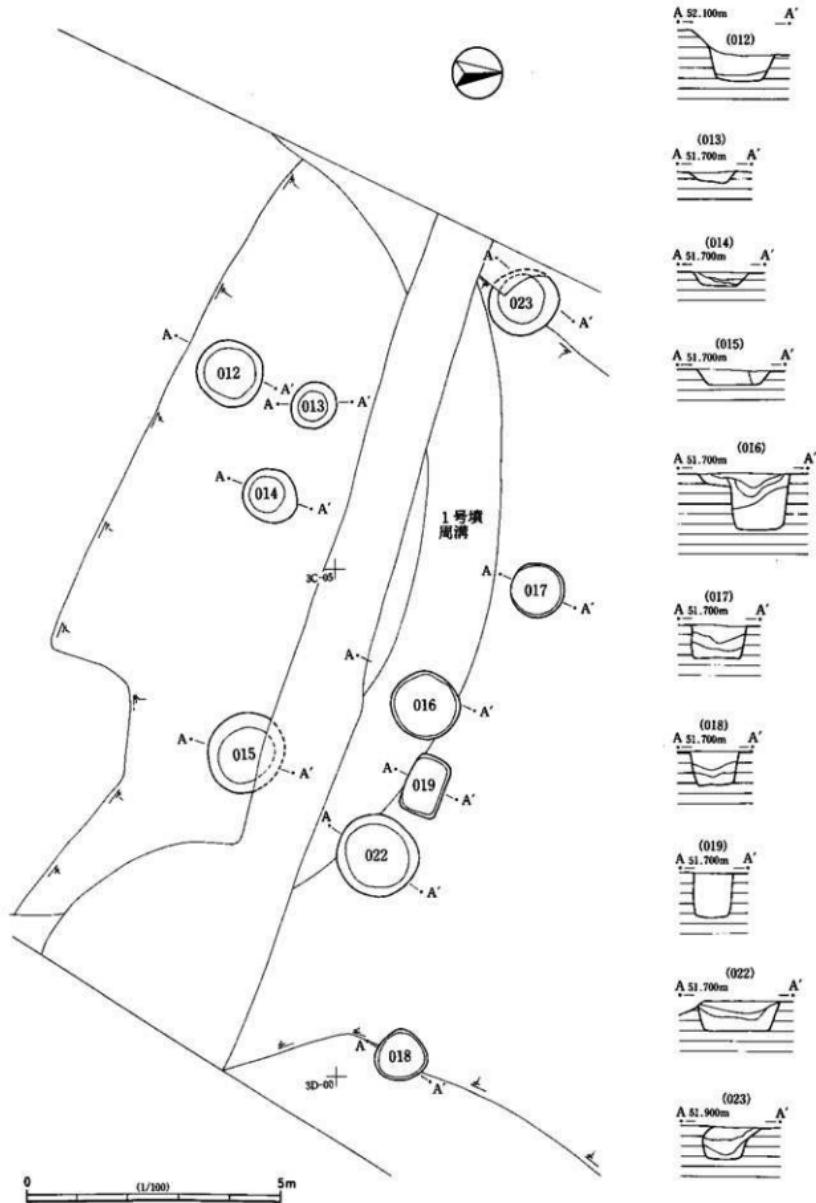
023号土坑（遺構：第20図 図版11）

調査区中央部の3Cグリッドに所在する。

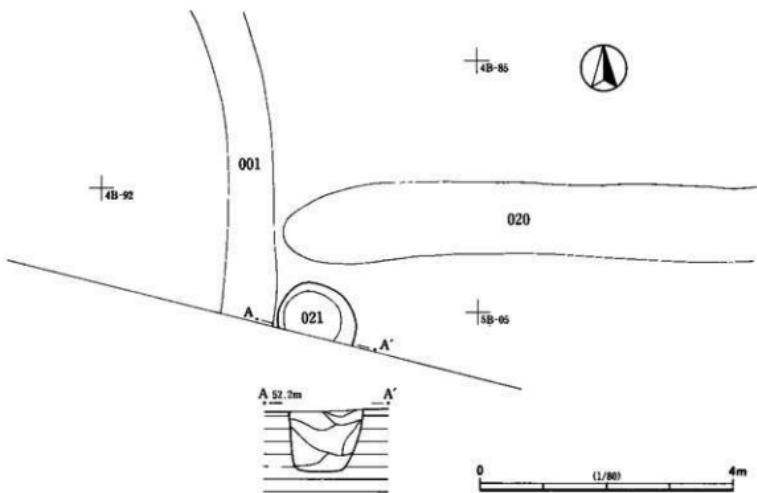
擾乱によって一部破壊されているが、平面形は梢円形を呈し、長径1.2m、短径1.0m、確認面からの深さは70cmである。長軸方位は、N-45°-Wである。下底部は、直径0.9mの円形であり、北東壁は垂直に近い角度で立ち上がるが、南東壁はオーバーハングしている。

覆土は、暗褐色土を主体としローム粒が混入している。上層には、わずかに黑色土の混入もある。

遺物は、出土していない。



第20図 土坑群



第21図 021号土坑

024号土坑（遺構：第25図 図版11）

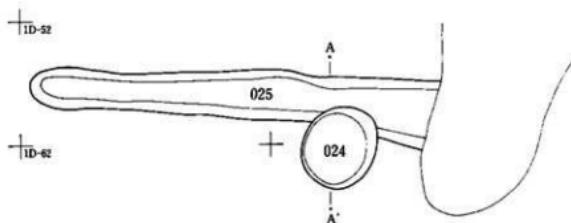
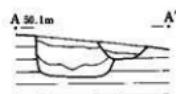
調査区の北端、1Dグリッドの緩斜面に所在する。

025号溝状遺構と重複し、同溝によって壁の一部を破壊されている。

平面形は、斜面に沿った長軸を持つ橢円形であり、長径1.4m、短径1.2mである。確認面からの深さは1.2mである。

覆土は、暗褐色土を主体とし、上層には黒色土、下層には明褐色ローム粒の混入が顕著である。

遺物は、出土していない。



第22図 024号土坑及び025号溝状遺構

(2) 溝状遺構

002号溝状遺構（遺構：第22図 図版12）

調査区の南東端、5Bグリッドに所在する。大部分が調査区外にあり、幅は計測不能である。

確認面から下底面までの深さは53~71cmであり、下底面には深さ15~20cmの連続する3つのピットが彫り込まれている。下底部の幅は14~42cmであり、壁は、確認面からの深さ10~20cmのところまでほぼ垂直に近い角度で立ち上がり、それより上部はなだらかに立ち上がる。角度の変わる10~20cmの深さで、不連続ではあるが硬化面を検出した。よって、この溝は道として使われていた可能性がある。

覆土中から、土師器片が出土したが、図示できるものはなかった。

003号溝状遺構（遺構：第23図 図版12）

調査区南部の4Bグリッドに所在する。

006号住居跡および009号住居跡と一部重複し、006号住居跡の壁、および009号住居跡の壁と床を破壊している。

延長距離は12mで、幅64~80cm、深さ6~12cmである。

遺物は、出土していない。

020溝状遺構（遺構：第24図 図版12）

調査区の南端、4Bグリッドに所在する。東側部分は調査区外であり、遺構の全容は不明である。

005号住居跡と一部重複し、同住居の壁と床を破壊している。

断面は、逆台形状を呈し、上面幅は0.8~1.2m、下底幅は0.4~0.6mであり、確認面からの深さは、29~52cmである。

覆土は、暗褐色土を主体とし、ローム粒が混入している。上層は、黒色土を主体とし、粘性が強くしまりも良い。下層は、ローム粒、ロームブロックの混入が顕著であり、粘性がなくしまりも弱い。

覆土中より土師器片が出土したが、図示できるようなものはなかった。

025号溝状遺構（遺構：第25図 図版11）

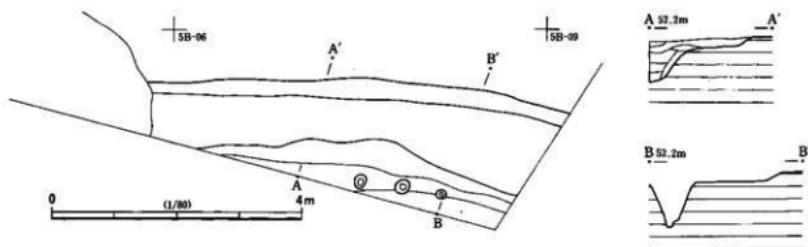
調査区の北端、1Dグリッドの緩斜面に所在する。

024号土坑と一部重複し、同土坑の壁の一部を破壊している。

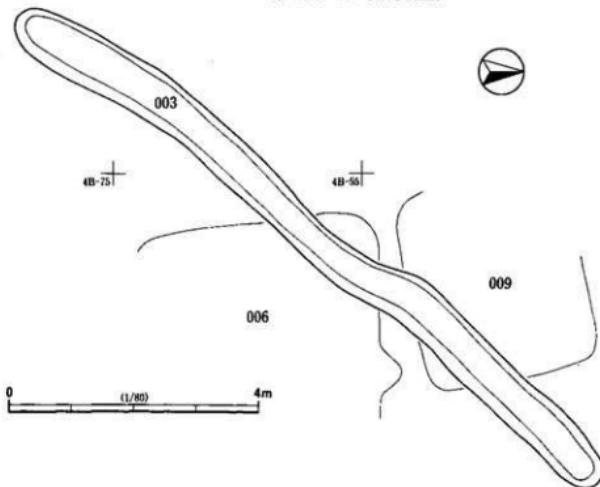
東西に延びる溝であるが、擾乱により東側部分は破壊されているので全容は不明である。検出した部分での延長距離は6.5mで、幅0.7~1.1m、深さ19~27cmである。

覆土は、暗褐色土を主体とし、ローム粒が混入している。

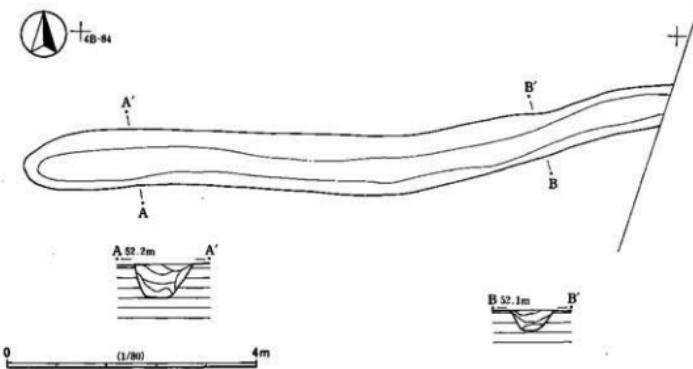
遺物は、出土していない。



第23図 002号溝状遺構



第24図 003号溝状遺構



第25図 020号溝状遺構

III まとめ

1 旧石器時代

本遺跡から出土した石器は、VII層より剝片が2点のみであった。本遺跡の南西部約300mに今郡カチ内遺跡が存在する。同遺跡の発掘調査では、IV層から切出形石器、ナイフ形石器等がまとまって出土している¹⁾。時代的には、羽計清水西遺跡の石器がやや古いと思われる。今後の本遺跡周辺での発掘調査によって当地区での旧石器時代の様相が明らかになっていくと思われる。

2 古墳時代

古墳時代の遺構は、堅穴住居1軒、溝2条（古墳の周溝と思われる）、円墳1基を検出した。円墳については伴出遺物が多く、遺物から築造時期を割り出すことは困難であった。東庄町における古墳の発掘調査例では、古墳時代後・晚期に小規模の古墳とりわけ円墳が集中していることを考慮すると本調査で検出された円墳もおそらく古墳時代後期以降の築造である可能性が高い。

尚、東庄町史には本調査区の周辺に古墳群の存在を示唆する興味深い記述がみられるので、原文のまま引用する。

「まとまった古墳群としては、橋地区の台地上に大古墳群が存在していたと思われる兆候が随所にみられる。その理由としては、

（1）この地区は弥生時代の集落跡の存在は認められるが、古墳時代については多少の土器の散布がみられる程度であって、集落の存在をうかがわせるほどの土器の散布ではなく、墓域として土地利用がされている印象が強い。

（2）現在墳丘が認められる古墳は非常に少ないが、台地全面に墳丘を思わせるような微高地が点々と認められ、埴輪片や石棺に用いられたと思われる雲母片岩の破片が多数採集されている。

（3）台地上の畠地には直径20~30m前後の規模で黒色土が環状又は方形になってみられるが、これは古墳の周溝に堆積した黒色土が耕耘機などによる深耕のために地表に掘り上げられたものと考えられ、またこの地域の耕作者から畠の耕作中耕耘機などの刃先にしばしば大きな石があたる、との話を聞いている。これはすでに墳丘は消滅しているものの、現在でもかなりの数の古墳が存在していることを明確に証明しているものである。以上がその理由であるが、台地全体のうえからみれば、現在の羽計団地から橋小学校を経て東大社に至る道路の東側部分にこの傾向が強くみられる²⁾。」

千葉県文化財センター発行の千葉県埋蔵文化財分布地図（2）では、上記の東庄町史に該当するいわゆる「橋地区」は、「羽計古墳群」「橋古墳群」「石出古墳群」その他として掲載されている³⁾。文化財分布地図に掲載されている埋蔵文化財包蔵地は、平成9年11月6日までに判明したものである。それによると「橋地区」及びその周辺地区において確認されている古墳は形態としては、円墳が大多数を占めており、その数は、約40基である。畠地内に存在している古墳も皆無とはいえないことを考慮すると、かなり規模の大きな古墳群が存在していた可能性が高い。

本遺跡において検出された円墳では、南側において周溝に沿うように溝が検出された。この溝も古墳を

巡る周溝であった可能性が高いが、北側斜面と東側町道部分では、検出できなかった。

二重周溝を有する中小規模円墳の存在は、千葉県においては類例は正福寺1号墳をはじめとして十指に溝たない⁴。今後の当地区における発掘調査の進展等により二重周溝を有する小規模円墳の検出例が増加することを期待したい。

本遺跡で検出された主体部の形態は、いわゆる箱式石棺である。東庄町で検出された古墳で同様に箱式石棺が確認された例としては、婆里古墳があげられる⁵。石棺の石材は、雲母片岩いわゆる筑波石である。印旛地域をはじめ、利根川流域に於いて検出される古墳の石棺の石材としては、比較的多く使用されている。

3 奈良・平安時代

堅穴住居跡7軒を検出した。円墳の南側に集中して検出され、比較的高密度に住居が建てられている。さらにまた、7軒中5軒が切り合っていることからも、大規模集落であったことが考えられ、周辺への広がりを予想できる。

かつて行われた隣接地域の調査成果をみると、南側の今郡カチ内遺跡では、同時代の住居跡が多数検出されている⁶。今回の調査区についてみてみると調査区南側に住居跡が集中している。

以上の点から、今郡カチ内遺跡を含み今回の調査区を北限とする地域にかなりの規模の集落が構成されていた可能性が高い。

また、1点ではあるが、住居跡より墨書き土器が出土した。墨書きされた文字の内容は、破片であるため全内容を確認できないが、確認可能な部分では、「道」の草書体と判読できた。今後の発掘調査により墨書き土器の量も増加していく、東庄町の古代史に不可欠の資料となるであろう。

4 中世以降

溝状遺構4条、土坑12基を検出した。土坑12基中10基はまとまって所在し、土坑群を構成している。証拠となる伴出遺物はないが、形態及び大きさからおそらく墓穴であろうと考える。

注1 小宮 孟 1984 「東總用水 高部宮ノ前遺跡・今郡カチ内遺跡・小座ふちき遺跡・青馬前畠遺跡」

2 銚千葉県文化財センター

2 東庄町町史編纂委員会 1982 「東庄町史（上巻）」

3 財団法人千葉県文化財センター 1998 「千葉県埋蔵文化財分布地図（2）」

4 沼澤 豊 2000 「研究連絡誌第56号 円墳築造の企画性」 銚千葉県文化財センター

5 大木 衛 小松 繁 中山 吉秀 杉山 晋作 1972 「婆里古墳」 東庄町教育委員会

6 村山 好文他 1990 「今郡カチ内遺跡」 銚香取都市文化財センター

写 真 図 版



周辺航空写真



調査区全景
南から



調査区近景
北から



旧石器出土状況





1号墳
全景



1号墳主体部
遺物出土状況



1号墳主体部



1号墳主体部
掘り方



1号墳
内側周溝
(H.12年度)



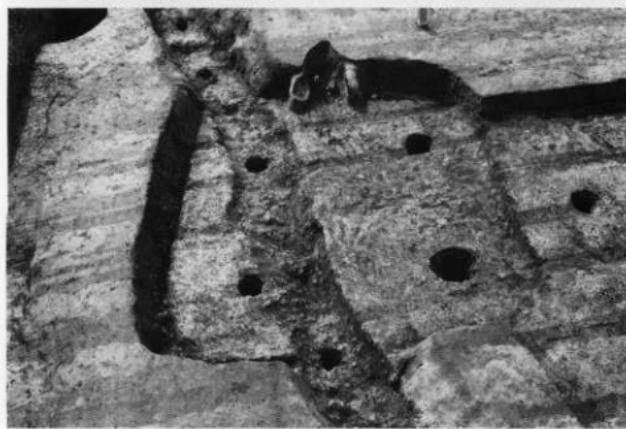
1号墳
内側周溝
断面



004号竪穴住居跡



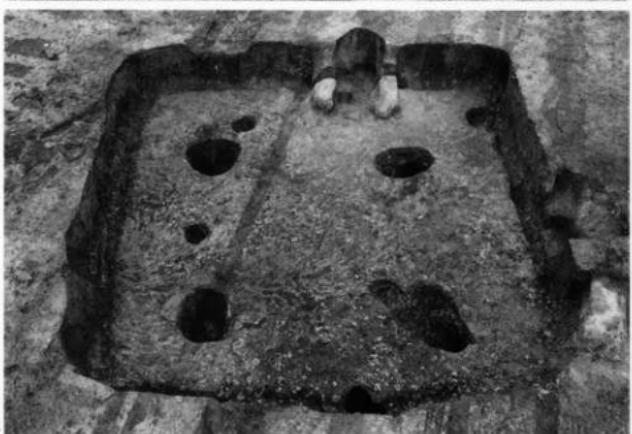
004号竪穴住居跡
カマド



005号竪穴住居跡



005号竪穴住居跡
カマド



006号竪穴住居跡
カマド



006号竪穴住居跡
カマド



004号竪穴住居跡



007号竪穴住居跡
カマド



008号竪穴住居跡



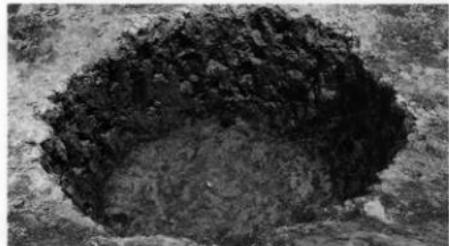
009号竖穴住居跡



010号竖穴住居跡



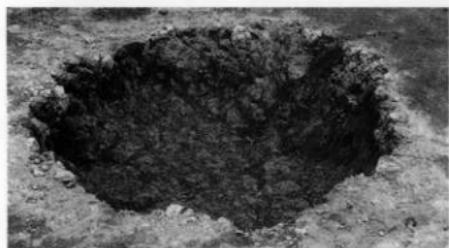
011号竖穴住居跡



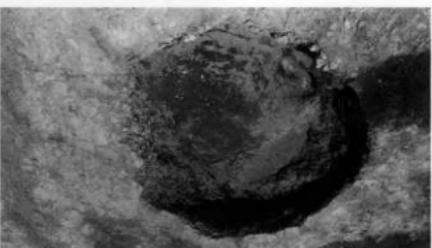
012号土坑



013号土坑



014号土坑



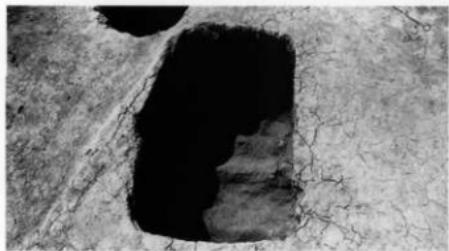
015号土坑



016号土坑



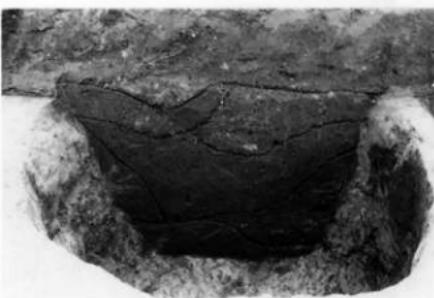
017号土坑



018号土坑



019号土坑





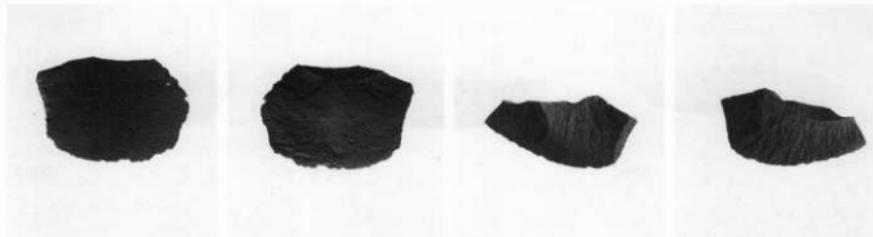
003号溝状遺構



020号溝状遺構



遺構確認状況



旧石器-1

旧石器-2



027-1

1号填-1

1号填-2



1号填-4

1号填-3

1号填-5



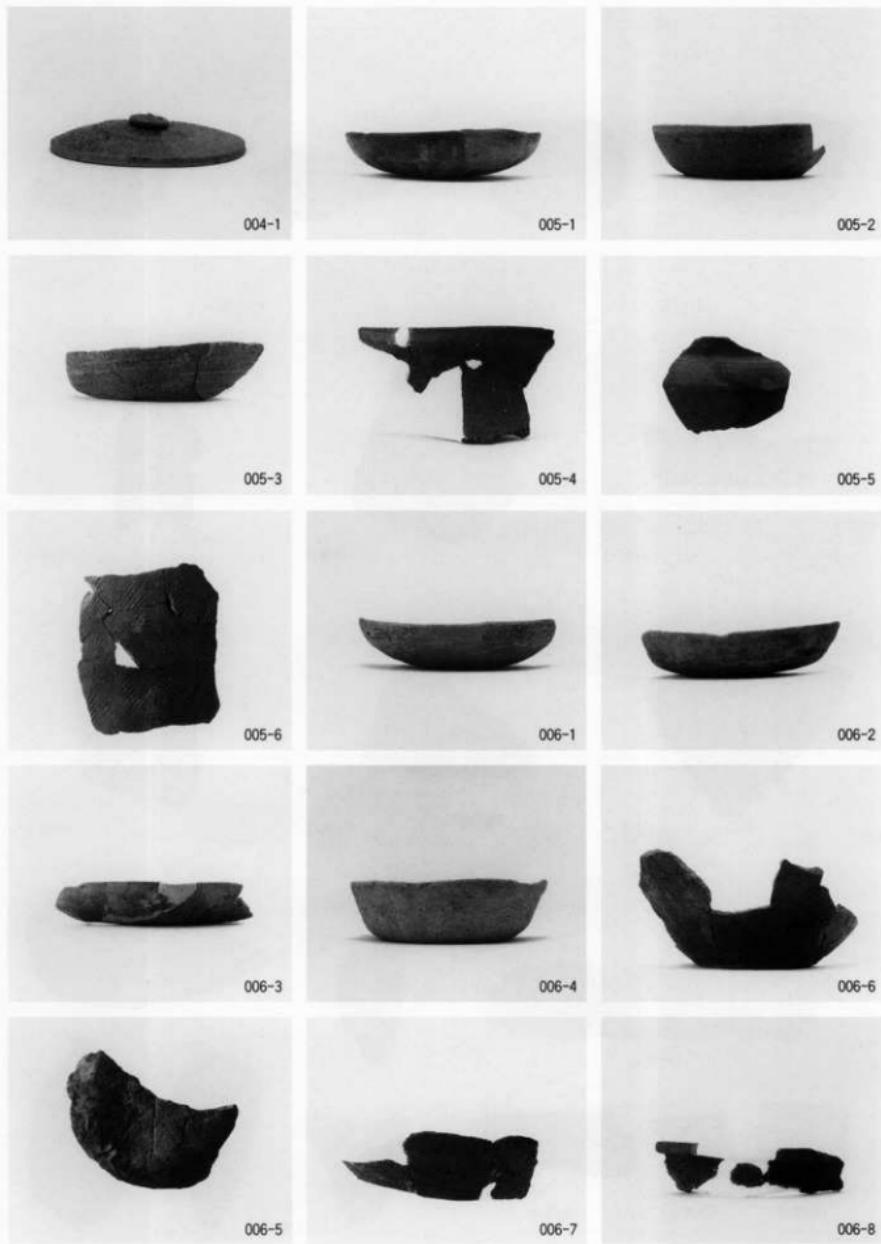
1号填-6

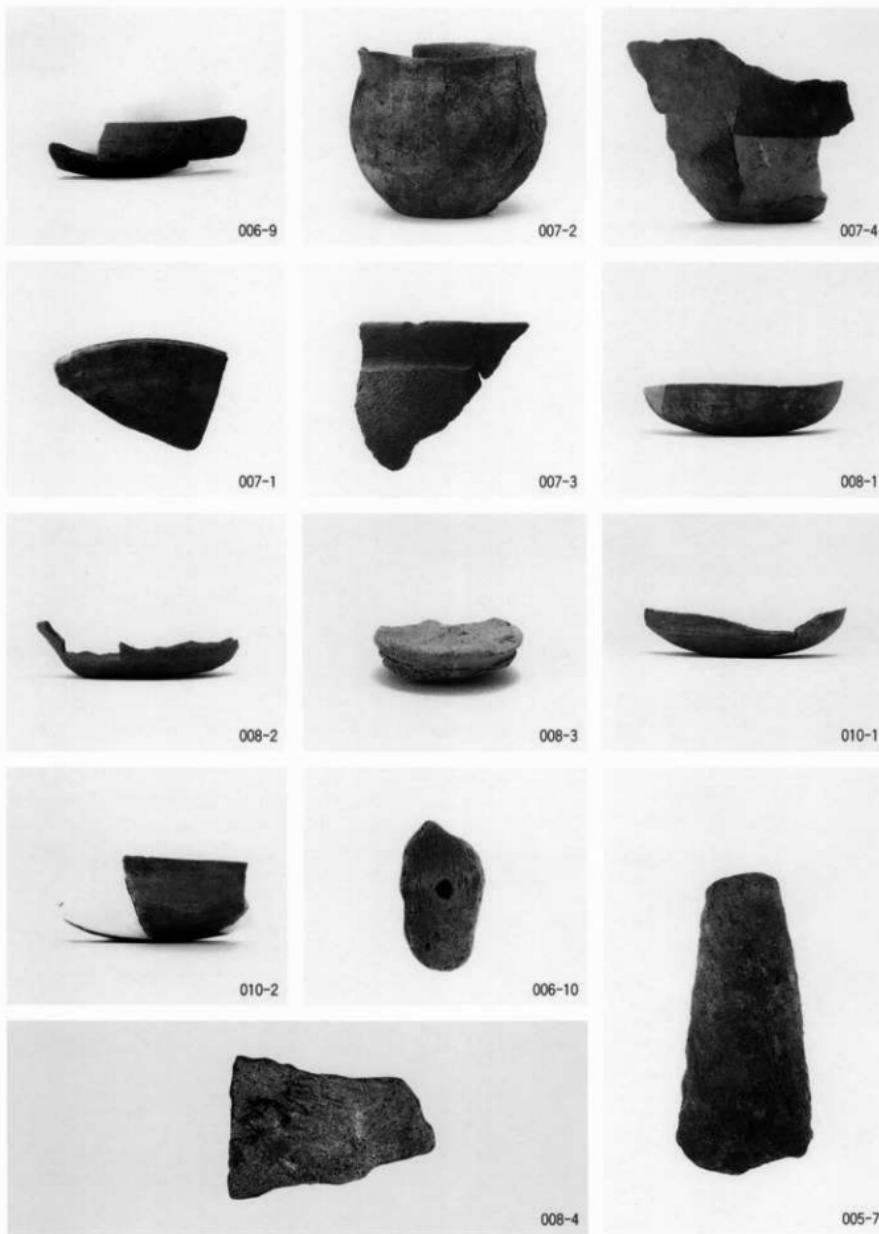
1号填-7

1号填-8

1号填-9

1号填-10





報告書抄録

ふりがな	はばかりしみずにしいせき							
署名	羽計清水西遺跡							
副書名	一般県道下続橋停車場東城線埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	財団法人千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第401集							
編著者名	遠藤治雄							
編集機関	財団法人千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL043-422-8811							
発行年月日	西暦2001年3月30日							
所取遺跡名	所取遺跡所在地	コード 市町村	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
羽計清水西	千葉県香取郡 東庄町羽計 2,732-171ほか	349	006	35度 49分 09秒	140度 41分 37秒	1,300 723.2	一般県道下続橋 停車場東城線事 業に伴う埋蔵文 化財調査	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
羽計清水西		旧石器時代		銅片 2点				
		古墳時代	竪穴住居	1軒	土師器			
			溝状遺構	2条	須恵器			
			古墳	1基	土師器、須恵器、刀子、砥石			
		平安時代	竪穴住居	7軒	土師器、須恵器、浮子			
中世	溝状遺構		4条					
		土坑	12基					

千葉県文化財センター調査報告第401集

羽計清水西遺跡

—一般県道下總橋停車場東城線埋蔵文化財調査—

平成13年3月30日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 千葉県土木部

千葉市中央区市場町1番1号

財団法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 正 文 社

千葉市中央区都町1丁目10番6号